

Newsletter

2008. Jul. No. 12



大学、教養、リベラルアーツ

教養研究センター副所長 | 鈴木 忠^{あつし} (医学部)

かなり最近までずっと、来住舎にあるのは「教養教育センター」なのだと思っていました。そうではなく「教養研究センター」なのだと私の頭の中に定着したのは、ようやく今年に入ってからのような気がします。教養教育と教養研究、響きは似ていますが、内容はずいぶん違う感じです。そういえば、当センターができる以前には「教養教育研究会」という集まりがあったなあ。ごそごそと戸棚の中を探したら大きな報告書が出てきました。普通は、このような良質の紙をふんだんに使った報告書のたぐいは（このNewsletter もそうですが）、紙がもったいないなと思いながら、執筆者には申し訳ないですが、ほとんど毎回捨て去っていたのです。ところがこの冊子は保存してありました。なるほど、このセンターにも流れている理念に納得しました。

大学、教養、リベラルアーツ。これらはどれも私にとっては同じようなことばの響きがします。いわば夢のような、憧れのような、愛着を感じていたといっても良いかもしれません

ん。大学という組織に対して、学生の頃から漠然と感じていた印象です。ところが戦後からずっと、大学の「一般教養」に対する風当たりが相当なものだったことを知りました。「大綱化」とそれに対する各大学の過度な反応については、大学政治の世界に鈍感な私にもさすがに感じられました。

た。慶應義塾大学医学部でも、2年間だった日吉の課程が徐々に縮められ、現在では1年のみとなりました。リベラルアーツが大学を根本から支えていると思っていたのは、単なる素朴な信仰のようなものだったのでしょうか。リベラルアーツとは何か、その歴史的な実体についてもっと知りたいと思っています。

それにしても思うのは、ヨーロッパの大学に確かに流れている豊かな時間と、せせこましい日本の時間との違いです。なぜ日本の職場はこうなのか。現在0歳児の世話に振り回されつつ、午後6時過ぎからの会議の多さに閉口しています。夕方5時には帰宅して、個人の時間、家族との時間を大切にしたいと思っても、そうさせない日本的な職場。慶應義塾大学も例外ではなかったのです。なんとかなりませんか。さきほどの文句で「時間」を「教養」と置き換えても良いと、私は思っています。

CONTENTS

1	巻頭言	大学、教養、リベラルアーツ
2	特集	基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」 「日吉カリキュラム検討委員会」への期待 — 「基盤研究—カリキュラム研究」の果たす役割 教養研究センター基盤研究「カリキュラム研究」の軌跡 日吉カリキュラム問題の歴史的経緯と教養研究センターのカリキュラム研究
5	活動報告	外部評価 学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクト 身体知「オクスフォード大学 コーパス・クリスティ・カレッジ聖歌隊」演奏会 楽しい体—「身体知プロジェクト」と「声プロジェクト」 2008 公開セミナー 「三田の家」 2008 年日吉キャンパス公開講座春学期 日吉行事企画委員会（HAPP）春学期の活動
8	ニュースフラッシュ	選書公募／基盤研究予定／教員サポート／生命の教養学／サイエンスカフェ
8	事務局だより	着任挨拶





基盤研究「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」

「日吉カリキュラム検討委員会」への期待
——「基盤研究——カリキュラム研究」の果たす役割
伊藤行雄（経済学部）

教養研究センターでは、学部を超えた教養教育の問題について一貫して取り組んできました。その一つが、基盤研究「カリキュラム研究」です。現状の学部教育を調査・研究し、提言を重ねてきました。これらの提言の趣旨が生かされる形で、5月23日大学評議会で、「学部共通カリキュラム委員会」ならびに「日吉カリキュラム検討委員会」の設置が決まりました。この特集では、その活動の軌跡と背景、課題についてお伝えします。

最近、研究室の狭隘化がひどくなり、余計なものは極力捨てるよう努力しています。ところが私には捨てるまえに目を通す癖があり、なかなか処分できずに困っています。すぐにごみ箱に入れられないものは、たいていカリキュラムや制度改革にまつわる書類です。こうした記録を読み返して驚いてしまうのは、今、われわれが取り組んでいる問題が実は20年、30年前にも議論されていた事実を読み取ることができる、という点です。口角泡を飛ばして議論したテーマも一部は実現したものもありますが、たいていは記録のなかの文章に収まり、そのまま長く眠り続ける場合が多いのが実情でしょう。つまり忘却の彼方に置かれていたというわけです。

去る5月23日の大学評議会で「学部共通カリキュラム委員会」、および「日吉カリキュラム検討委員会」の設置が承認され、6月4日に第1回目の「日吉カリキュラム検討委員会」が開催されました。教養研究センター「基盤研究」では昨年度2回にわたって共通科目検討委員会の設置を「大学教育委員会」で訴えてきましたが、日吉主任会議が中心となってようやく実現への第1歩を踏み出したわけです。今回の委員会は長年、共通授業として日吉キャンパスで展開してきた総合教育科目を根本的に見直すことがその主旨となっています。なかなか難題も多い委員会になるでしょうが、ぜひとも成果ある委員会になってほしいと思っています。

「基盤研究」では、何度も提案してきた検討委員会が正式に設置されることになり、その主張の一部が認知された点、喜ばしい成果だと思っています。会議への協力も惜しまないつもりですが、こうしたキャンパス全体、あるいは三田キャンパスのメンバーも交えて議論していく場では、現行の制度を前提としながら変革を考えていくため、かな

りの意見の相違や、変革への抵抗も想定されます。「基盤研究」（カリキュラム研究）は当初より自由な立場でカリキュラム研究を中心として、セメスター制、副専攻制や評価問題、既存の共通科目の分析などを行い、現状の学部システムにとらわれることなく、議論を重ね、提言書も2冊刊行することができました。しかし、提言はあくまで提言であって、実現されなければ意味がありません。そのためには日吉カリキュラム検討委員会の議論が大いに進み、まずカリキュラムの内容の検討を行い、講師の決定が行われること。そして全体カリキュラムがセメスターを前提として、いくつかのグループ分けが行われ、それが副専攻のための科目群になっていけば、もっとも理想的な成果だといえるでしょう。ぜひ実現する方向で議論されていくことを期待して止まないところです。本年度の日吉キャンパス公開講座の総テーマは「記録・記憶と構想の現場」ですが、主旨を書かれた荒金直人氏の「……私たちは、過去から送りつけられたものを自覚的に受け止め、それを糧にして新たな現在を生き、時には過去との断絶を試みながら未来を開く……」という言葉にあるように、検討委員会が、実りある「構想の現場」になればよいと思っています。そうならば廃棄寸前の私の書類も息を吹き返し、新たな議論の糧になるかもしれません。

しかし現実にはなかなかそう簡単に議論が進むとは言い切れません。そのために「基盤研究」は「検討委員会」、「日吉主任会議」、各学部などに自由に提言ができるように、カリキュラムの研究をさらに深めるべく、評価問題、セメスター制の現状分析と他大学との比較、副専攻制のあらゆる可能性を探り、2007年、2008年度の日吉共通総合教育科目の現状の分析を進め、提言可能なモデル作りを目指しているところです。

基盤研究の記録は、塾内に公開されています。
<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/kiban1/> をご覧ください。(塾内からのみアクセスできます。)

教養研究センター基盤研究「カリキュラム研究」の軌跡

- 2002 年 教養研究センター発足。それに先立ち教養教育研究会（羽田功座長）文部科学省委託研究『教養教育グランド・デザイン』が発行される。ここでは、大学の枠組みを超えた教養教育の考え方の根本理念と、カリキュラムのグランド・デザインが作られた。
- 2003 年
～04 年 木俣章座長のもと日吉における総合教育科目の問題について集中的に研究を行った。設置科目、設置母体等、履修者数等に関する総合的なデータ化を行った。報告書『日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点』（2005）を発行し、学部間での調整を行う機関の設置を提言。
- 2005 年
～06 年 「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」（伊藤行雄座長）として、成績評価、習熟度別クラス編成の問題、米国リベラルアーツカレッジのカリキュラムについて調査するとともに、履修とカリキュラムに関する大規模な学生アンケートを実施した。それに基づいて『慶應義塾大学の教育カリキュラム研究——改革への処方箋』を発行し、成績評価方法、セメスター制度、履修登録制度、講義要項、日吉設置学部共通科目の新しいあり方等に関し、28 項目の提言を行った。
- 2007 年～ 「慶應義塾大学のカリキュラムに関する研究 Ⅱ——4 年間を見据えた教養教育に関するカリキュラム研究」として研究が継続中。セメスター制度、副専攻制、成績評価等に関する問題に重点をおいて、調査・研究を進めている。



基盤研究 幹事の視点—副専攻制

副専攻制度はどう在るべきでしょうか。現在、複数の学部において、専攻以外の学問領域を系統立てて学ぶための制度が整備されつつあります。これらは広い意味での副専攻制度、それに類するものと言って良いでしょう。その実現にあたっては、学部ごとに求めるものも、利用可能なリソースも異なり、したがって最適解も様々です。これらの試みを学部の垣根を越えたものとし、総合大学ならではの、また慶應義塾ならではの知の豊穡さと結びつけるためには、副専攻制度の

理念を再確認し、それに基づくゆるやかで柔軟な枠組みを整備することが必須。副専攻制度とは複数の専攻で学ぶ為のものか、境界的な領域を学ぶためのものか、あるいはよりインテンシブな教養教育を受けるためのものなのか。その答えは一朝一夕には得られないでしょうし、一つに限る訳でもないでしょう。しかしこれは、慶應義塾大学が社会に送り出すべき卒業生像とも密接に関わる重要な課題です。

（坂本 光）

Feature

特集

基盤研究 幹事の視点—セメスター制

本大学において、学部毎に多様な学期制が行われています。湘南藤沢キャンパスにおいては、完全半期制が総合政策・環境情報学部の開設当初から実施されています。春だけでなく、秋の入学、進級、卒業もあります。通年3学期制をとっている信濃町キャンパスの医学部を除くと、その他の学部は通年半期制になっています。ここでの「通年半期制」の定義は、科目が半期化されているが学年制は維持されているということをしします。ただし、法学部だけは秋の進級と卒業も

あります。「通年半期制」がはたして完全半期制へ向けての1つの過渡期なのか、それとも1つの形として洗練され定着していくものなのか、進むべき方向がはっきり見えているわけではありません。しかし、学生の立場にたち、より教育的で柔軟な制度に変えていく必要があることだけは確かだと思います。

(大場 茂)

基盤研究 幹事の視点—成績評価

成績評価とは何ををはかるのでしょうか？ 個人の能力でしょうか、努力でしょうか？ 努力に比例して結果が出るならばいいですが、個人の能力には差があります。学生に不断的な努力を求めたとして、評価している能力はその教員の授業に影響を受けたものでしょうか？「〇〇理論を理解し説明できればよい」と到達レベルを決めても、説明の上手・下手があるでしょう。上手い説明であれば高い評価になるのだけれど、説明が下手な者は理解度が低いことになるのでしょうか？

か？ 学生にとっての学びとは、下手な説明をわかりやすく変えることでしょうか？ この成績評価という問いの答えは簡単には出そうもありません。しかし、少なくとも教員は学生に自己の評価スタンスを伝えておく必要があり、学生も教員の観点を理解して努力することが、議論の枠組を固めることになると考えます。お互いに1歩進んで取り組むのです。これは、「簡単な努力」で実行可能なはずで

(村山光義)

■ 日吉カリキュラム問題の歴史的経緯と教養研究センターのカリキュラム研究

日吉の共通カリキュラム問題の歴史は、1949年に慶應義塾大学が新制大学となった時点にまでさかのぼる。当時予科時代の教員が、文・経・法・工学部に分属して、一般教育科目を担当することになった。その際、一般教育委員会が設置され、その下位に部門会が置かれて各学部の科目の調整を行うことになっていた。しかし、担当教員が各学部に分属したこともあり、調整機能はあまり実効性を伴うものではなかったようである。

1991年、大学設置基準の大綱化が行われ、一般教育科目の履修単位に関する制度上の縛りがなくなると、各学部独自で改革を進めていく。1993年に一般教育委員会は廃止された。多数の共通科目は、そのまま存続したが、科目設置や変更に関して学部間で調整を行う機関はこの時点で消滅した。1994年「日吉カリキュラム等調整部会」が、これらの問題整理と解決を試みたが、挫折している。

教養研究センターの基盤研究「カリキュラム研究」は、こうした背景から生じてきたさまざまな問題に取り組むために立ち上げられた。

(佐藤 望)

外部評価

教養研究センターは2008年3月8日、開所以来の5年余りの活動に関し、「みいだす・つなげる・ひろげる——教養研究センターの過去・現在・未来」という総題の下、外部評価のための報告会を開催しました。最初に横山千晶所長が「センターの活動を振り返って」と題し、全体的な総括を行いました。具体的には、センターの設立目的・ミッション・特色・組織・資金について説明し、5年間の取り組みを3つの特色——①「個」から「世界」への研究の拡大、②研究成果の実践的な試行、③成果のフィードバック——として概括した後、センターの活動のプロセス（「みいだす」→「つなげる」→「ひろ

げる」）を図解しました。次に佐藤 望副所長が「みいだす」という観点から、萩原眞一副所長が「つなげる」という観点から、中島陽子副所長が「ひろげる」という観点から、それぞれ関連する諸活動に関し、目的・成果・概要を報告しました。これらの報告では、いかにして専門を超えた専門の向こうにある「教養」を目指していくか、また大学が地域や社会によって支えられる文化風土をいかにして育成していくか、といった点が強調されました。

最後に横山所長から「教養研究センターのこれから」と題し、10年目に向けてさまざまな課題（①組織の見直し、②新た

な事業の展開、③慶應発の「教養」の構築）にどのように取り組んでいくのか、に関して基本方針が示されました。特に③については、情報化とグローバル化が急速に進展している中、どのように他者や社会とつながり、どのようによりよく生きるべきか、といった問題に対応しうる、新たな「教養」を模索していく決意が表明されました。外部審査員の方々から頂いたご意見・ご批判等を十分に検討の上、それを貴重な糧として今後の教養研究センターの活動に役立てていく所存です。

（萩原眞一）

学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクト

3年間にわたって活動を続けてまいりました文部科学省学術フロンティア推進事業「超表象デジタル研究」プロジェクトが去る3月31日をもって終了いたしました。

すでにニュースレターや活動報告会、活動報告書などを通じてお知らせしてきましたように、この間、統合研究ボードを中心に、コンテンツ研究、学習環境構築研究、超表象デジタル化研究の各ユニットがそれぞれの課題に応じたさまざまな研究活動を展開してまいりました。その成果は、研究成果報告書、同ダイジェスト版、同DVD版（4枚）として取りまと

め、文部科学省に提出いたしました。さらに、4月26日には来往舎シンポジウム・スペースで最終研究成果報告会も開催しました。西村太良常任理事にも出席いただいたこの報告会の第一部では、黒田昌裕（内閣府社会総合研究所所長〔当時〕）、山本泰（東京大学大学院教授）、小沼通二（本塾名誉教授）、重松淳（SFC総合政策学部教授）の各氏をお招きして、研究成果についてのコメントをいただき、第二部では斎藤太郎（文学部教授）、村山光義（体育研究所准教授）のお二方にプロジェクト・メンバーを加えたシンポジウムにおいて、研究成果に基づいた義塾におけ

る教養教育の未来について議論を行いました。

なお、上記報告書は教養研究センターHPの特定研究からhydiに入り、「未来の教養教育」をクリックしていただけるとDVD版と報告書のPDFファイルがご覧いただけます。学部や日吉キャンパスにおけるカリキュラムの議論などにご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、3年間にわたる皆さまのご理解とご協力にあらためて感謝申し上げます。ありがとうございました。

（羽田 功）

身体知「オックスフォード大学 コーパス・クリスティ・カレッジ聖歌隊」演奏会

6月27日（金）13:10より、来往舎イベントテラスにて、オックスフォード大学 コーパス・クリスティ・カレッジ聖歌隊の演奏会が開かれました。同聖歌隊は、1517年にカレッジの正式機関として創設された伝統ある合唱団です。

声を媒介として、長い歴史のなかで伝

承されてきた伝統と文化を学生に体感してもらおうという目的で、基盤研究「身体知を考える」の芸術教育を考える部門の企画として実施しました。

30名のメンバーが、イギリス新進気鋭の若手指揮者ベンジャミン・ウッドゲーツ氏のもとで、ギボンズやパーセルなど

の音楽を中心に美しく格調の高い歌声を披露しました。演奏会のあとは、慶應義塾大学学生と聖歌隊メンバーとの交流会が開かれ、交歓の時を過ごしました。

（佐藤 望）

（写真は8頁）

楽しい体——「身体知プロジェクト」と「声プロジェクト」

教養研究センター基盤研究「身体知プロジェクト」は、4つの柱から成り立っています。①身体知教育・研究の理論的枠組みを考える月例研究会活動、②身体と精神の解放を目的とする実験授業「体をひらく・心をひらく」の企画と実施、③既存の言語教育（外国語教育研究センター設置科目「英語ドラマ」）の中での身体知教育の試み、④身体知としての音楽教育を考える試み、です。①は、塾外からも美術・人類学者中島智氏などにご参加いただき、5月、6月と月例会を開き、7月も行います。②は、今年で3年目の試みとなりますが、2008年度は「言葉と身体」というテーマで後期に開講すべく、日本語・日本文化教育センター手塚千鶴子教

授の協力を得て、鋭意準備中です。③は、横山千晶法学部教授（教養研究センター所長）担当の授業で、現在実施中です。④も、佐藤 望商学部教授（教養研究センター副所長）担当の授業で、現在実施中です。学期末には、音楽授業の一環としての学生演奏会やオックスフォード大学聖歌隊演奏会を開催します。

『「声」を考える——一貫教育から高等教育における実践と新しい教育モデルの提示』（略称「声プロジェクト」）は、慶應義塾創立150年記念未来先導基金の援助を受けて、3つの活動を行います。①志木高等学校速水淳子教諭担当の国語の授業で、能楽師の指導を受けて、古典芸能の声を学生に体験させる『「能」と『声』

の授業』、②横山千晶教授を責任者として夏期に行われ、大学教養教育における文学の授業のあるべき姿を模索する「声と身体と歴史文化の接点を探る教育の実験——大学教養教育における歴史と文学」、③佐藤望教授担当の音楽の授業で行われる、「声と身体と歴史文化の接点を探る教育実践——大学教養教育における音楽実践」の3つです。

研究会は様々な領域から多彩な研究者が集まり議論風発、授業は学生の参加度および教員・学生間の交流度の高い内容。教員も学生もみんな楽しくやっています。

（武藤浩史）

2008 公開セミナー

○書けない状況を克服するヒントとトリック

○共生？それとも無知？——宇宙開発を例にした SF 文学・科学・技術の相互関係

「日本におけるドイツ年」2005年11月に日本学術振興会の招聘で来日されたドイツ・ケルン大学哲学部のハンス・エッセルボルン教授が同大学ライティング・センター所長ヘルガ・エッセルボルン＝クルムビーゲル博士とこの春、日本を再訪されました。おふたりからの希望もあり、2年半ぶりに教養研究センターでお話していただきました。

今回は日程関係上、同日開催とし、5月8日（木）の18時20分から、まずエッセルボルン夫人より『書けない状況を克服するためのヒントとトリック（原題：Tipps

und Tricks gegen Schreibblockaden）』について30分弱の発表をお願いしました。ケルン大学ライティング・センターの各コースや指導内容を解説された前回の続編という位置づけで、「レポートや卒論の執筆を間近に控えた学生にどんな指導や習慣づけを行うべきか」というかなり具体的で、対象も教員をターゲットにした内容でした。マインド・マップの使用や執筆計画マネジメントに関する言及は、教員に留まらず、社会一般に通じる有効なヒントになったのではないのでしょうか。

短いコーヒー・ブレイクを挟み、19時

15分頃から、次いでエッセルボルン氏より同様に30分ほど、『共生？ それとも無知？——宇宙開発を例にした SF 文学・科学・技術の相互関係（原題：Symbiose oder Ignoranz? Beziehungen zwischen Literatur, Wissenschaft und Technik am Beispiel der Erkundung des Weltraums）』についてお話されました。前回のテーマは「ロボット」でしたが、今回の御題は「ロケット」で、第一次・第二次世界大戦間のロケット開発技術とドイツ SF 文学の相互関係について、最近の研究成果をご披露いただきました。

時間節約のため、両氏のドイツ語講演中は、いずれも翻訳原稿を70-80枚のPowerPointシートに分割、同時字幕として背後に投影しました。また質疑応答には逐次通訳がつき、専攻にとらわれることなく教員・学生から活発な意見交換がありました。

（石原あえか）



「三田の家」

「三田の家」プロジェクトとは、「大学の傍らにある、自主運営のラウンジ的な教室」を目指す各種活動の総称です。中心の場である「三田の家」とは、慶應義塾大学三田キャンパスの近くにある木造住宅を借り受け、学生自らが改装工事を行い、2006年9月30日より一般公開している空間です。

当プロジェクトでは、従来「異分野」「多文化」「異組織」ゆえに、近隣で生活していても出会うことの稀であった人たちがカジュアルに出会い、学びあい、交歓する場を創り出したいと目指しています。そのために、三田地区に関係した様々な人々が、気軽に交流しつつ様々な活動を共に行なう「教室」と「居酒屋」との中間的な場として活用され、新しい「学び」や「出会い」、「まちづくり」の形が生まれることを期待しています。

運営は、曜日ごとに異なる複数のマスター（現在は慶應義塾の教員が中心）が担当しており、活動領域は多岐にわたっています。例えば、留学生と日本人学生との異分野交流、オープンな環境で行うゼミナール、地域イベントやメディアづくりの計画と実行、たまたま居合わせた人での食事会、など多種多様な企画で一杯です。

「三田の家」プロジェクトについて言葉を費やして来ましたが、この場を理解するには一度来てくださることが一番かと考えます。各曜日のマスターがそれぞれのスタイルで皆様を歓迎いたしますので、ぜひ一度お越しください。

（長田 進）

2008 年日吉キャンパス公開講座春学期

2007 年度公開講座のテーマ「モノづくり」の講師陣の先生方から、より内容を極めたいという受講者の要望を踏まえて、2008 年の春学期に 3 名の先生が「参加型少人数制セミナー」を開催いたしました。講座 1：「サティ——音楽を超えて」講師：コミネティ・フィリップ（商学部 准教授）日時：5 月 9 日～ 30 日（毎週金曜日）18:15～20:15 受講者数 6 名 講座 2：芸術の春、創作の喜び——日本語文学（超）入門 講師：佐藤元状（法学部 専任講師）日時：5 月 10 日～ 31 日（毎週土曜日）13:00～15:00 受講者数 15 名（内 塾生 5 名） 講座 3：物と技術と「総かり立て体制」——ハイデッガー「プレーメン連続講演」を読む 講師：荒金直人（理工学部 専任講師）日時：5 月 10 日～ 31 日（毎週土曜日）15:30～17:30 受講生

9 名

それぞれの講義が 4 回ということで、短期間ながら緊張と熱意のなかで、文字通り少人数の、密度の濃い講義になったようです。回が進むにつれて、受講者と講師のやり取りが活発になり、質疑応答だけでなく、受講者の意見も積極的になり、充実した時間を共有されたとのことでした。受講者の方は、18 歳の学生さんから、現役の塾生、公開講座常連の 50～60 代の方まで、幅広い年齢層でした。こういう機会はめったにないことで、真の教育現場ではないかと思う次第です。次回からはより拡充を図りたいと思います。

（小淵昭夫）

日吉行事企画委員会（HAPP）春学期の活動

日吉行事企画委員会（HAPP）の春学期の活動についてご紹介します。この委員会では、①新入生歓迎セクションと②公募企画セクションを二本の柱と定めて行事を企画・開催しています。新



入生歓迎セクションは、主として春学期に行う依頼型のプロジェクトです。2008 年度春学期は、9 件（うち 1 件中止）の企画を用意しました。この中で、特に「室伏鴻舞踏公演」（5 月 26 日、於 イベントテラス）は、400 名以上の観客を集める人気ぶりでした。HAPP の春の行事は、塾内諸機関・諸団体との共同開催が一つの特徴です。このことにより、経費・労力の節約に加えて、学内連携においても、非常に有益な効果を生んでいます。一方、秋の公募企画セクションは、塾生・教職員の自主企画を HAPP が主催するものです。この企画は、現在 11 件の応募申請を精査している最中です。我々は、HAPP の活動を通して、慶應義塾が自由な発想をもって学問に向かい合う場であることを学生諸君に感じてもらいたいと考えています。

（小菅隼人）

News flash

ニュースフラッシュ

選書公募

教養研究センターでは、2008年度の「教養研究センター選書」の原稿を募集します。この企画は、当センター所属の研究者が、学術論文とは異なる啓蒙的な切り口で、先端的な研究成果を紹介し、学生や一般読者に新鮮な知の形成に立ち会う機会を提供することにより、研究・教育相互の活性化を目的としています。読者の指針となる書誌情報を多く盛り込んで頂くため、枚数は前年度より若干増え、400字詰原稿用紙100枚程度（40,000字）になります。奮ってご応募ください。

（萩原真一）

サイエンス・カフェ

「うに！すし？！」と題して3月15日に開催された第5回は、当カフェ発案者の中島陽子（文学部）によるウニのお話で、顕微鏡でのウニの受精観察が好評でした。第6回『『若返り』の秘密と可能性をさぐる』高橋利幸（商学部）（5月17日）では単細胞生物ゾウリムシの寿命の問題と、その若返りに関する話題提供でした。リピーターも多く、小学生からお年寄りまで約30名の参加者があります。アンケート結果を参考にし、親しみのもてるカフェをめざしています。

（鈴木 忠）

基盤研究

「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」 今後の予定

7月19日（土）の研究会のなかで、早稲田大学・オープン教育センター所長の土方正夫氏の講演会が開かれます。講演のテーマは「早稲田大学オープン教育センター テーマスタディ（全学共通副専攻）について」です。開催場所は西新宿の新宿ニューシティホテルです。研究会は塾内教職員の方々には公開で行っています。ご参加希望の方は教養研究センター事務局までお問い合わせください。

（佐藤 望）

教員サポート

教育・研究に役立つ情報を共有するため、教養研究センター・メディアセンター共催で「メディアセンター・サービス活用術」が開催されました。6月18日のベーシック編「少人数セミナー授業での実践ワークショップ」では、資料収集・整理についての効果的な指導法が紹介されました。6月23日のステップアップ編「文献管理ソフトRefWorks 利用法」では、文献情報を研究・論文執筆に生かすソフトRefWorksの使用法を学び、あわせて各種データベースについての相談コーナーが設けられました。

（種村和史）

生命の教養学

今年度のテーマは「生き延びること」です。吉田泰将、高桑和巳、鈴木忠の3名により集められた講師の顔ぶれは多彩で、遺体科学、寿命、クリプトビオシス、医療人類学、労働環境、エッジワーク、哲学、文学、武道、等々……幅広い対象を、さまざまな切り口から紹介します。毎回、約30分を費やす質疑応答を聞くうちにその日の講義内容が反芻され、57名の受講生それぞれが「生死を超えて延長される生」について考えを巡らせるようになっていきます。

（鈴木 忠）



【事務局だより】 着任挨拶



このたび教養研究センター事務長に就任いたしました松本です。

日吉駅前に立つと、塾生の流れを包み込

むような新緑の並木は、日吉在勤当時の10年ほど前と変わりなく、雨後の瑞々しさに癒される思いがしました。しかし、街道沿いの竣工間近い協生館の威容と新校舎工事が視界に入ったとき、静謐な中に変貌の工

ネルギーを秘める日吉キャンパス、との印象を感じ取りました。

センター業務に加え、研究室主事が兼務で、そのテリトリーの中心舞台が来往舎とのことから、早速館内を拝見いたしました。三田の研究室棟とは趣を異にしたこの建物の研究諸室群と最新設備の見事さ、イベントテラス空間には瞠目した次第です。

コーディネート・オフィス会議に出席して、センターの多彩なプロジェクトの存在に驚嘆し、目下はこれら組織と機能がどう

繋がってゆくのか、謎解きに奮闘しています。徐々に「知」の言葉に触れ、「身体知」の効用を認識いたしました。今後は、所長・副所長を初めとする諸先生方のご指導と事務室の皆さんのご協力の下、更には日吉のチトンフィッドのご相伴にもあずかり、センター業務に一意専心する所存です。で、よろしくご教導をお願い申し上げます。

（松本 実）



Newsletter
2008. Jul. No.12

慶應義塾大学教養研究センター (Keio Research Center for the Liberal Arts)

発行日 | 2008年7月10日 代表 | 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1 TEL | 045-563-1111 (代表) Email | lib-arts@adst.keio.ac.jp
<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/>